
魔王的な（後から決める）

瞬那強生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王的な（後から決める）

【Zコード】

Z3542Z

【作者名】

瞬那強生

【あらすじ】

高校1年になる女の子っぽい名前の男「轟 刹那」（とどろきせつな）が美少女にあつたり、魔王になつたり、勇者と共戦したりなど波乱万丈の面白あり、ツツコミあり、バトルあり？のドタバタファンタジーコメディー 作中に他作品と思しき表現や名詞などが多々出でますが、それは全て幻覚です。フィクションです。どうか、温かい田で楽しんでください。

第1話 「プロローグ的な」

魔王。

その響きから、連想するのはきっと世界征服なんか考えちゃつたり勇者が生意氣だから、ダンジョンにモンスターを待機させて戦わせたり

魔界からモンスターの群れを連れてきて、人々を恐怖のどん底に陥れたりするといった

おぞましい想像をするだろう。

だが、俺は違つた。

いつも、勇者とそのユカイな仲間たちからボッコボコにリンチされ頼れる仲間が一人もいない一人ぼっちでとてもかわいそうな奴だと思つていた。

しかし、勘違いしないでいただきたい。

俺は別に、魔王が好きだというわけではない。

当然ながら、世界を救う勇者はメツチャかつこいいと思うし何らかの力を使って、魔法をつかいモンスターを倒したいとか世界をまたにかけて、魔王と死闘を繰り広げたいとか思つたりもした。

まあ、俺がまだそういう類のものを信じていたころの話だ。もうそんなことが、ありえないことを理解しつつも自重しつつもアニメやマンガやラノベでそのすこぶる少年心を抑えている今日この頃だ。

俺の名は、轟 刹那。

毎晩、アニメやマンガやラノベをみて過ごしている

いわゆる普通の、少し名前が女の子っぽい（禁句である）ところを除けば

大体そこらへんに転がっているちょいオタな高校1年生だ。

高校1年生と言つたが、正確には高校1年生に「なる」とこりだ。

・・・このように、「普通の人間だ」的なことをいつやつに限つて
大抵普通ではない。

ある日突然戦争に巻き込まれ巨大ロボに乗り、ビーム何たらを振り
回して戦つたり

七つ集めたら願いが叶うボールを巡つて、強敵とすさまじい格闘を
繰り広げたり

手が伸びて、海賊王になつたりなんかしない

俺は、正真正銘の「普通」の人間だ。

さつきから、著作権ガン無視だがそれだけ器の大きい人間だという
ことにしておく。

そんな俺が、3月に我が愛しの中学（いい思い出なんか一つもない）
を卒業し

4月から私立聖魔璃亞学園に入学することになつた。

そして、明日が入学式 文字通り青春の1ページだ。

さあ、これからどんな青春が俺を待つてゐるんだ！？ワクワクすつぞ

！！

と期待に胸を膨らましながら眠りについた。

第1話 「プロローグ的な」（後書き）

初めての作品なのでいろいろと間違えたりするかもしませんが、温かく見守ってください。感想とかアドバイスとかもうえるとうれしいです。

第2話 「オカンと僕と時々銀髪美少女」

翌朝。

ただいまの時刻 AM 8:40 . . .
このままでは入学式初日遅刻というマンガでは面白いが
本人にとつては、まったく面白さのカケラもないバットハプニング
が起こってしまう。

この寝坊の理由は、じつに明確だ。

昨夜、ワクワクしすぎてなかなか眠れず . . .
いわゆる、遠足や修学旅行というイベントの前に訪れる例のアレだ。
俺は、ベットから跳ね起きパジャマを脱ぎ捨て、制服に着替え、階
段を駆け下り

母に、もう日本語ですらない文句やら罵倒を浴びせてパンを1枚か
ぶりつき家を飛び出た。

母からもらった学園までの地図を見ながら自転車を猛烈にこいだ。
この母が描いた地図は、やたらと螢光ペンで色分けされており
寝起きの日ではとてもキツイ。これでわかりやすくしたつもりだ
うか？ 有難迷惑である。

そんないろんな意味で残念な地図を頼りに学園を探す。

ようやく地図の「ここ」（目的地であろう）とデカデカと書いてあ
るところに到着したが . . .
その時ようやく思いだした。

母は、重度の方向音痴だということを。なぜ、忘れていたのだろう
か？

それは多分、強烈な眠気とバタバタしていたせいだろう。
目の前に建っているのは、最近 改装したばかりの小学校だつた。
校門には、私立聖真理阿小学校しりつせいまりあしょうがっこうと書いてある。惜しい！！

「はあ～」

ため息しか出でこない。

どうしたものか。これはもう完璧に大遅刻である。こうなつたら、もうこのままバツクれてやるつか。いや待て、そんなことしたら俺の青春が終わる。

そうだ。事情を話してこの小学校の人道を聞こう。職員室へ行き、事情話した。なんというか、ほかの先生の視線が痛い。

教頭らしき人物が、やさしく教えてくれた。以外にもこの小学校から学園は近いらしい。職員室を出るとき軽く会釈をして先を急いだ。

大体、なぜ俺が学園の場所を知らないのかといふとこれには並々ならぬ、涙ぐましい理由がある。もともと高校なんて卒業さえできれば何でもいいと考えていた俺はまあ、普通に友達と同じ高校を受験した。特に、難しい試験はないのだが今年は受験者が多かつたらしく（少子化なのにね）

当然ながら頭の悪い俺は落ちた。

そして次に受験した高校では一応合格したが突然の放火事件により高校もろとも灰と化した。

3度目の正直つてことで猛勉強したが前日に流行りのインフルエンザにかかり受験さえできずに不合格。

もう世界に呪われているんじゃないだろうかと引きこもりがちになつた俺に

母がこの私立聖魔璃亞学園じつりせいまりあくえんの話をもちかけてきた。

つまり、母親の口内で高校に通えるのである。

まったく、母には頭が上がらない。（先ほど罵倒してきたばかりだが）

ていうか、アンタが場所知らないでどうすんだよ！

この行き場のない怒りをペダルをこぐ足にそそぎこんだ。

学園は、俺の家からなら自転車で10分くらいで着くのだが
寝坊と母の地図の見事なまでのコラボレーションにより20分くら
いかかつた。

「やつと着いた」

今度こそ校門には、私立聖魔璃亞学園（しりつせいまりあがくえん）と高らかに書いてあった。
校門には、きれいな桃色の桜が散つていて、外見はどこか神秘的で
神々しく何よりデカい。

学園というよりは教会に近い感じだ。

そして、大きな鐘が一番上のほうにある。

お～～～、なんかいい感じじゅねつ。

とか、歓喜に浸つていると自分が遅刻していることを思い出した。

急がねば。

駐輪場に自転車を止めて、体育館に向かつた。

当然、入学式にでるためだ。（無駄だろうが）

アスファルトに自分の靴音だけが響く・・・

体育館に向かうのだが自分の足音以外何も聞こえない・・・

やつぱり、もう終わつたんだろうな。

アスファルトを抜けて体育館へと続く渡り廊下を完全諦めムードで
氣怠く重い足で歩いた・・・

しかしつ、俺は次の瞬間 目を見張つた！

渡り廊下の最奥、体育館の入り口前に何やら人らしきものが横たわ
つていたである！

俺は、いつの間にかその人らしきものの方へ走っていた。
近づいているうちに、気づいたが倒れている人はどうやら 女の子のようだ。

もっと近づいてみると・・・っ！？

俺の眠気が一気に大気圏を突破し、月をも貫いてぶつ壊してしまつと思つくらいにぶつ飛んだ。

危うく、サイヤ人が大猿になれなくなるところだつた・・・じやなくて！

俺の目の前にいる女の子はものすんげえ可愛かつた。
いわゆる、「美少女」だ。

雪のような白い肌

針金のように鋭く、ナイーブで透き通りそうな銀髪
気の強そうな眉毛と目

そして、一番俺の目についたツーサイドアップ（も、萌える）
・・・・・

はつ、どのくらい見とれていたんだろうか。

よく見たら、顔色が優れていない。

これは、いけない！！

早くこの子を保健室へ連れて行かなくては！！
しかし、どうやって？

担いでいくのか？

彼女いない歴15年の俺が？

女の子の目を5秒も見つめられないこの俺がか？
いや、無理無理無理無理！！

「うーん。」

ギクッ！

銀髪美少女がうなつてている。

顔色が悪くなる一方だ。

・・・・・

ええい！！

男、刹那 目の前に倒れている女の子一人救えないで何が男だ！！
(今、女の子みたいな名前のくせにとか言った奴は誰だ！！)
俺は、その銀髪美少女を抱いで保健室を探すこととした。

第3話 「リアル・・・怖い」

とても甘い香りがする・・・

それはまるで、バーラに「コナッシュ」の香りを混ぜた感じだ。
心なしか背中のあたりに生暖かく柔らかい感触がある。

ああ、ここは、天国だろ？

俺の人生のなかでこんなに幸せを感じた瞬間があつただろ？
もつこのまま、天授をまつとつしてしまおうか。

・・・・・はつ！

俺は、意識を取り戻した。

危ない危ない、もう少しで本当に逝つてしまつところだつた。

三途の川の向こうで、バッチャンやジッチャンが
コタツを囲んで、ミカンをむさぼつていたのが見えた気がしたが
氣のせいだろ？

うん、氣のせいだ。きっと俺の踊る心が見せた幻だ。

そして、現実に戻つてきてから蘇つてきた、この重量感。
明らかに、重力と俺の体重だけでなせる重さではない。
まあ、当然つちやー当然だ。

なぜならば、背中に美少女を背負つているのだからである。
もちろん、この重さには体重もあるが精神的重みもある。
こんな美少女をこんなオタが背負つているといふ、罪悪感？
ちょっと待て、なんで罪悪感を感じにやーならんのだ？

どちらかといふと、優越感だろ。いや、そんなことはどうでもいい。
大事なのは、この子を無事に保健室まで送り届ける体力が俺にある
のかどうかだ。

さつきから言つているが、俺はオタだ。
リモコンより重いものを持つ生活をまず、していい。
よつて、基礎筋力も基礎体力も皆無。

もちろん、小中学校での体育の成績は「オール」

見たか！これが俺の人生の一番の称号だ！！（えっへん）

もう一度言つが、大事なことはただ一つ

この子を無事に保健室まで送り届ける体力が俺にあるのか否かだ。だから、早急に保健室をさがさなくてはならない。

しかし、ほんとにデカいなこの学園。

一階だけで伊達直人の心の広さくらいあるんじゃないだろうか。今の例えでわかるとおりそれだけ広く感じるということだ。

幅2メートルはある廊下を歩き続けていると

生徒玄関口らしき場所を発見した。

そのまま隣の部屋の前に「保健室」と書かれてあった。

俺は、残りの全身の筋肉を励ましながらたどり着いた。

ドアノブには、「ただいま留守にしています」という掛けがつた。

この「」に非常に腹がたつかが、幸いにも鍵はかかっていなかつたので入ることにした。

保健室の中は、独特の消毒液の匂いがする。

ベッドがあつたので、女の子を寝かせた。

その隣に置いてある丸椅子に俺は、へたり込んだ。

非常に疲れた。

俺の背中には、まだ温かみが残っている。

ふと、女の子の方に目をやつた。

やっぱ、かわいいな。自分で気づかぬいつこにヤツいていた。

自分に渴を入れる。

背負つていて思つたのだが、この子結構胸が大きい。

身長は、そんなに高くはないが

出るところは出でいて、引き締まるところはしつかり引き締まっている。

（セクハラだぞ、自重しろ。）

しかも、甘くていい香りがする。

俺の疲労しきつた体が癒されていくようだ。

阿都元てんご魔女！自重いろ腐れ才女が――

自分で自分を罵倒するほど悲しいことはない。

保健室の中は、静寂しきつている。

このまま保健室にこの娘を置いていくわけにもいかない。
かといって、この娘が起きるのを待つていたらいつになるか分から
ないし

「うん」

しばらく、考え込んだ……

仕方ない、保健の先生を呼びに行くとするか・・

椅子から立ち上がり、保健室のドアノブに手をやつた。

その時つ！

Γ ΗΟΦ~~~~~. Η

俺の背中の方から悲鳴が聞こえた。

何事か！と振り向いたら視界が真っ暗だった。

どうやら枕を投げつけられたらしい。

枕が顔からずり落ち、視界が明るくなり悲鳴が聞こえた先を見るとそこには、さつきの銀髪美少女が赤面してこっちをにらんでいる。

•
•
•
•
•
•
•
•
•

しばらくの沈黙が続いた。

この沈黙を破つたのは、彼女の方だつた。

「「「、「」」」の、変態痴漢外道鬼畜キモい肩虫豚野郎オタメガネ～
～～～～～～～」

唖然。

一瞬俺の体のすべての器官と世界が停止した。
な、なんですと？

変態？鬼畜？オタメガ？

ちょっと待て、確かに俺はオタだがメガネではない。・・・つでは
なく！

こんな罵倒の嵐を受けた人間がこの世に存在しえるのだろうか？
あんな、美少女の口からこんな言葉が飛び出してしまうのか？
リアル、恐ろしい・・・

「あ、あの～」

一步近寄つた。すると

「来～る～な～」

あろうことか、その美少女は近くにあつた、本やら花瓶やらを投げ
つけてきやがつた！

「痛い～、痛いから～～～」

とりあえず、顔面直撃だけは避けた。

「お～、落ち着け～～～！」

俺が、また一步近づくと

「来るな、オタメガ～」

今度は上履きを投げてきた。

間一髪のところで下方の上履きの顔面への直撃を避けた俺だったが・

・

「ヅツ～！」

俺は、前かがみで倒れこんだ。

何が起きたかというと、俺の男にしかない男だけのシンボル（下半身のある一点）に

もつ上方の上履きがジャストヒット！

目の前が、真っ暗になる。

「お、おれは、たしかにオタだが、め、メガネじゃねえ・・・」

バタツ

なんていう捨て台詞だ。

ザコキャラの「覚えてるよ～」の方がまだ2倍くびこマシである。

第4話 「保健室の白衣魔女」

目を覚ました。

視界には、青い天井が広がり独特の消毒液の匂いが漂う。

ここは、どこ？私は、誰？

最後のは、嘘だ。

俺は、轟刹那

世界を魔王から奪還すべく立ち上がった勇者だ。

アレ、違つたかな？

まあ、大体そんな感じか。

ガシャンッ

俺の心の中にいる天使が悪魔を縛り上げ、プリズンに放り込んだ音がした。

今のクダリは、ほほねつ造だ。

俺は、何してたんだっけ？

・・・・・

バサツ。

俺は、状態を勢いよく起こした。

思い出した。すべて思い出した。からつきし思い出した。

確か俺は、倒れている女の子を発見し保健室まで背負つてきたはいが

見事に返り討ちに会い床に突っ伏していたのだつた。

まったく、あの女はなんだつたんだ？

命の恩人に向かつて、何たる無礼をしてくれやがつたんだ。

・・・・・・・？

そういえば、あの女はどこに行つた？

あたりを見回す。

彼女の姿はどこにもなく、ただ花瓶やら本やらが散らかっていた。

「はあ～」

思わずため息が出てしまつ。

あの女、結構顔色がよくなかったが大丈夫だろ？
まあいつか、恩をあだで返す奴はほおつておくとする。
それよりも床に散らかっているブツ共を片づけなくては。
俺は、せつせと片づけ始めた。

「ふう～」

片づけ終わつた。

なんだか、すつきりした気分だ。

・・・・・・・・・

何か忘れているような・・・
つ！

そうだ、今日は入学式初日俺は遅刻をしているのだった。

ただの遅刻ではない。大遅刻だ。

時間を確認する。

A M 1 0 : 3 0。

まだ、L H Rには間に合つはずだ。

俺は急いで保健室の扉を開き、走り出そうとした・・・
その時つ！ ドンつ！

「イッタ～いです～。」

かわいい声がした。

どうやら人にいぶつかつてしまつたみたいだ。
とりあえず、俺は目を開き謝ろうとした。

「すみません、急いでたも・・ん・で？」

俺は目を疑つた。

目の前に、白衣をまとつた小学5年生くらいの女の子が倒れている。押し倒してしまつたみたいなので俺は慌てて立ち上がつた。

「だ、大丈夫？」

小学生に手を差し伸べる。

「ありがとうございます、大丈夫です。」

こつちに大丈夫スマイルを向けてきた。
か、かわいいじゃねえか。言つておくが俺にそういう趣味はない。
ただ、純粋にだ。

目はあつとりしていて、腰のあたりまで伸びたきれいな黒髪ロング
が目に焼き付いた。

ていうか、なぜ小学生がここに？

「あっ、言つておきますけど、私 小学生じゃありませんですよ。」

「

と小学女子。

何つ、心が読まれている！？

俺が困惑しているのを察したのであらう、白衣のポケットから何やら取り出して俺に見せてきた。

「ねつ

そう言って見せてきたのは運転免許証と教員免許証だった。

「桂木 美歩？」

俺が尋ねるようござイテした。

「わ、」

そつ言つて二コと笑つた。

何々？ほんとだ。教師だ。年齢は・・・24歳！？
マジですか？リアルにこんなことがあり得るのか？
若作りにも限度があるぞ！
だから、本人に確認をとつてみる。

「マジですか？」

「マジです」

即答された。

「じゃあ、その白衣って・・・」

「わう。保健の先生ですよ。」

なるほど、真実はいつも一つなんだな。

「きみ、見ない顔だけど新入生？？」

と問われたので

「は、はい。今日からお世話になる。轟 刹那です。」

と混乱氣味の頭を整理しながら答えた。

「女の子みたいな名前だね」

「はつとけ！」

「あははっ、やっぱり名前のことはつと怒るんだね～。愛由^{あゆ}が言つてた通りだ～。」

愛由^{あゆ}が何か聞き覚えのある名前だ。

「まさか、愛由つて俺の母のことですか？」

「そだよ～。」

「これまた即答^{じきさつ}。」

轟^{とどろき} 愛由^{あゆ}、俺の実の母親の名前だ。

ていうか、なんで母の名前が出てくるんだ？

「それはね～、君のお母さんと私と学園長が親しい知り合いでだからだよ～。」

つまり、母が学園長に俺の入学手続きを頼みこんでしてもうつたと
いうことだらう。

つーか、何で心が読まれてるんだ？

魔法使いか何かだらうか？

「まあ～そんなど」とかいつ～。」

・・・・・・・

何かをあさりめた。

「ていうか～きみ、こんなとこで何してるの～？」

・・・・・・はつ！

そうだ～早く教室を探さないと～

だけど、どこにあるのか見当もつかん。

俺は美歩先生に、事情を話して教えてもらひついことにした。

話し終えると同時に先生は曇出した。

「あははははは～、君最高だよ～。世界に呪われてるんじゃない

？」

まったく同感だ。

「うん、事情は分かつた～。よ～し、ここは先生が一肌脱いで案内してあげよ～。本当に脱ぐわけじゃないよ～？」

「わかつてますよーー！」

まったく、この人が言つとシャレにならない。（いろんな意味で）そして、俺は美歩先生をパーティに加えると保健室を後にした。（なんちゃつて）

第5話 「アグレッシブと、ついつい紙一重」

「一、私立聖魔璃亞学園（略して魔璃学）は5階建てらしい
一階には保健室やカウンセリング室や職員室などがあり
二、三、四階には下から三年生、一年生、一年生といったふうに学
年分けされており

クラスは、1（ファースト）から4（フォース）まである。
五階には、校長室と各特別室がある。

ということを俺の隣をテチテチと歩くシケー（チビッ子ティーチャー）から聞かされた。

保健室を出て、左の方へ行くと一階へ上がる階段があつた。
しかし、先生は階段ではなくその横にあるエレベーターに俺を乗せ
た。

学校のエレベーターに乗るなんて、小学校にある給食を運ぶ専用のエ
レベーターに

入つていたらそのまま閉じ込められ運ばれて以来だ。
さすがは、魔璃学。だてにデカいだけじゃない。

そんなことを考えながら、ふと今何階にいるか確認する。

階数表示の数字が「4」のところへ移る。そのまま通り過ぎ「5」
のところへ止まった。

どうしたことだ？ 一年生の教室は、四階のはずだが……
エレベーターの扉が開く。

「うわ、うわ。」

先生が手招きする。

「あ、あの～。」

俺が口を開けようとしたその時、先生は「力い扉の前で立ち止まつた。扉の幅、3メートルはあるだろ？ な、なんだこの『力い扉は？開けたら、魔王なんかが待ち伏せてるんじゃないだろ？』

「ここが、学園長室だよ～。」

と美歩先生。

「なんで、学園長室？」

俺は、疑問をそのまま口にした。

「だつて～、まだアイサツしないでしょ～？」

なるほどな。確かに遅刻したし、入学式には出でないし・・・。挨拶よりも謝った方がよさそうだ。

先生は、コンコンッとノックすると

「うんじょ～、うんじょ～と。ん～～。」

一生懸命ドアを押している。

なんとも可愛らしい光景だろ？

まあ、確かにこの幼い体じゃこんなバカ力い扉なんて開けられないだろ？

「俺が開けますよ。」

俺にも開けられるか分からぬが、開けてみることにする。

アノアに手をやり、力を込める。

•
•
•
•
•
•

タメた
開かね

そして先生はハーフハーフで

卷之三十一

俺はある」とは言つた
なんて気つかなかつたんだよ。正直
恥ずい。

「先生、あの~、もしかして、それって引き戻しじゃないんですか?」

氣まずい沈黙

「いやせせり、そんなこと聞かねえゼロハムー秒前にせりこ
ていたわー。」

そんなことをいつ先生の顔が真っ赤である」とにはツッ 「まないで
おいてやる。

ガチャツ
扉が開く。
案外、扉は軽いようだ。

学園長室の中は、扉のわりには小さく右サイドには本がギッシリ詰まつた本棚。

左サイドには何か見たことがあるようなないような絵画が飾られ

部屋の中央最奥に学園長の豪華そな作業机と後ろ向きの椅子が置

後ろの窓から日が差している。

「よく来たな。」

椅子の方から低い声がした。

「ゴクリッ。

「マジですか。マジで魔王が待ち伏せていたといつのか？」

「「一」「一」

何やら聞き覚えのある鼻息をしてくる。

そして次の瞬間、椅子をぐるぐると回し振り返った！

・・・・・
「ジッコミビニ」がりすぎる。

まず、黒ずくめの衣装に黒いマスク・・・

次に不気味な呼吸音・・・

最後に右手に握ったFXライトセイバー・・・

「「二」の映画のスターでウォーズなシスの暗黒卿だよーーー！」

思わず思いつきりジッコんでしまった。

・・・・・

またしても気まずい沈黙・・・

「ふふふ。

ん？

「ふふふ、ふははははははあ～。」

えつ？

シスの暗黒卿が急に笑い出した。

「いやー、ナイスジッコミだよー少年ー！」

なぜか暗黒卿に親指を突き立てられた。

「悪い悪い、ちょっとカラかってみただけだよ。合格だ。」

合格？もうわけがわからん。

めちゃくちゃにトレイスしている俺の脳を落ち着かせてる間にベーダがマスクを脱いだ。

「ようこそ、我が私立聖魔璃亞学園へ。待っていたよ、轟じとろ 刹那せつな ゃん。」

マスクから出てきたのは、銀髪の美人だつた。正確に言うと大人の魅力というか

キャリアーウーマンげな感じだ。（もちろん、俺が救つたであろう美少女ではない）

「ちやんちやん ではありません。くんくん ですよ。駄一スベイ駄一学園長。」

俺は、ワザと嫌味つぽく言つた。

「いやだな。そんなに怒らないでよ。冗談だつてば、轟少年！」

ニヤリとした笑顔と突き立てた親指がこっちを向いている。

「ちなみに、私の名前は 星沢ほしざわ 椿つばなこの学園の学園長よ。ツツキーでいいわよ。」

なんというアグレッシブな人だ。

「じゃあ、シシキー学園長の度は入学をやっていたって ありがとハザルコ申した。」

一応、お礼をした。できる息子だからな。

「こ、こ、え、わざわざ無理言つて入学してくれてこちがうありがとハ。」

へつ？

「あの～、母が無理言つたんじゃ～。」

「何言つてこるの～」ハジが無理言つたのよ。
どうこういひだ？

「なんで俺 なんかを？」

「・・・何も聞いていないのね・・・」

なにやら、意味深な言い方だな。

・・・・・・・・・・

少しの沈黙の後

「ま、それは おいおい話すわ。」

とあいまいにされた。

「あ、それから少年～入学初日から遅刻とは感心しないな～。」

「す、すみません。これには深い理由が・・・」

俺は、若干年齢詐称ぎみな保健の先生に話した通り伝えた。
すると、またもや噴出しあがつた。

「ふははははははは、少年は根っからの魔王体質のようだね。」

魔王体質?なんだそれは?

「魔王体質ってなんですか?」

「まあ、それもおこおい話ですよ。」

またかよ。

「あの~、どうでござりますか? やれやれと、もう余つてゐなう話が早いや。じゃあ、付いてきて。」

そつこつて学園^{ガム}のドマへと向かう、ツッキー。

「あの~、どうでござりますか?」

俺は、尋ねた。すると

「少年のクラスだよ。」

そう言つて、ウインクされた。

俺のクラスか。友達できるだろ? 俺?
不安を胸に抱きながらも

新たにツッキーをパーティに加えて学園長室を後にした。

第6話 「それでも僕は、やつてない」

学園長室を出て右に少し行くと、やつせ上がり始めたトレベーターがある。

そちらのほうへ足を向ける。

「どうして行くの？」

トシシキー、もとこそ園長。

「えつ、一年生の教室は二階じゃないんですか？」

と悪者、もとい俺。

「うそ、やつだけど少年はいつか。」

そつ置いて、手招きする。

学園長室を出てから左の方へ歩き出した。

少し歩くと、各特別室が見えてきた。

部屋の名前は横文字の英語で書かれていて読めないので

どんな部屋なのかよくわからない。

そつこんば、この学園はどんなことに力を入れている学校なのだろうか。

母からは、「世界が365度、変わると1年か」としか聞いていない。(実質5度)

「あの、この特別室って何をするんですか？」

疑問をそのままぶつける。

「まあ～、焦るな少年。クラスについていたり話すよ。」

さつきからなんなんだ？もつたいてぶつて。

そういうしてこるうちに

「着いたよ。」

と言われたので顔を上げる。

五階の最奥、扉があつた。

窓から光が差し込んでいるせいか神々しく光っているよう見える。その扉の真ん中には「？」といつ文字が描かれている。

「！」が、少年のクラス・・クラス？（ゼロ）よ。」

クラス？？確かにクラスは1（ファースト）から4（フォース）までじやなかつたのか？

もう、俺のサーバー（脳）じや整理しきれない。

「さあ、そここの扉を開いて 新世界の神になりたまえ！」

と駄ースベイ駄一、もとい学園長。

「よーし、ラピュタ王に俺はなる！・・・って、なんでもやねーん！」

思わずノコツシ ロミをしてしまつた。

「いいぞ、少年！そしてそのままラピュタとともにロミのまつに海

へ落ちて行きたまえ。」「

それは、褒めているのか？それともけなしているのか？

「というのは冗談として、早くお開けなさい。きっとみんな歓迎してくれるわ。」「

・・・・・

本当に歓迎してくれるだろうか？

正直、俺の学校デビューにはいい思い出がない。

中学に入学するとき俺はこの町に引っ越してきた。

小学生の時は体が弱く、学校にはほとんど来ていなかつた俺は当然友達などおらずそのまま卒業。

小学校を卒業する頃には俺の体は正常になり、無事中学へ入学。しかし、入学式の日、朝起きると田舎まし時計が1時間遅れており、すでに遅刻。

慌てて自転車をひざき始めるところの果てにはティヤがパンク。

自転車を乗り捨て急いだが着いた頃には、入学式は終わっており教室で自己紹介が行われていた。

誰かの自己紹介の最中にドアを勢いよく開けてしまい、氣まずい空気の中 席に着いた。

自己紹介ではスーパーに囁きまくり、髪は寝癖でボサボサ、制服は乱れ

チーンを触っていたので体中サビの匂いがして、その日 一日中サビ臭を振りました。

しかも、担任は生活指導の先生らしく入学初日から服装を指導され目をつけられた。

それからの学校生活は、もう酷いというか呪われていた。

体育祭では骨折し、修学旅行では前日にオタフクかぜ などなど

て。

そんな涙ぐましいスクールライフでも、耐えている俺に神様は少しだけ友達をくれた。（類は友を呼ぶ）

少しでも友達がいるだけでどれほど自分の世界が彩られるかを知つた。

そう、今になつて思えば俺は運が悪い。

しかもただの運の悪さではない。魔王級だ。

さつき、学園長が言つていた「魔王体質」とはこのことだらう。（たぶん）

・・・・・

急に不安になつてきた・・・

よし、開けるか。

俺は、ドアノブに手をやる。深呼吸を一回。

期待やら不安やらを抱え、ノックをしドアをゆっくり開いた。

・・・・・

俺はその日の光景を一生忘れないだろう。ていうか、忘れられないだろう。

期待を開けたはずのドアがまるでパンドラの箱を開けたのではないだろうかと錯覚してしまいました。

教室の中は普通の高校より豪華で

部屋の真ん中には新品のよつときれいな木製の机が6つあり椅子には肘置きがあり、15度くらい傾けられそうな背もたれがある。

黒板はホワイトボードで、照明はシャンデリア・・・

そんなことはいいとして、俺が最も気がかりなのは
真ん中の椅子に座っている5人がこっちを向いているが顔が見えないといふこと。

正確に言うと顔に見覚えのある覆面マスクをしている。
みんなスカートを履いているので、かろうじて女の子であると分か
つた。

白い布の上には、見覚えのあるマークがある。
手の甲をこちらに向け人差し指で天を指さしており、手の甲には目
が描かれている。

その手の甲の背景には、それまた大きな目が描かれていた。
そしてそのマークの上には1から5までの数字がふつてある。

・・・・・

頭が痛くなってきた。

友達が欲しいとは思っていたが、まさか「ともだち」が来るとは思
わなかつた。

俺は「よげんの書」を書いた覚えはないのだがな。
何だこの学園は？マスクネタが流行っているのか？

・・・・・

どうしよう・・・ツツコむべきだらうか？

ツツコんだら負けな気がする。

だが、ツツコまなければこのまま世界にウイルスをまき散らして
世界を滅亡させるかもしれないでツツコむことにしよう。

「どこの20世紀げな少年のともだちだよー。」

若干、棒読みげにツツコんだ。

「バシッ！「痛つ。」

学園長からチヨツプを食らつた。

「そんなツツ」「//」じゃ、蚊も殺せないぞ！」

卷之三

「ジジ」「//程度で蚊が殺せたり、すでにこの国の蚊は全滅しますよ。」

まあ、お笑いブームだからな。

「それだ！ナイスツッ」「ミー！ そういうツッ」「ミー」が欲しくてわざわざこのマスク作って被つてもうったのに、このままじや作り損だつたよ。」

「やっぱ、アンタが仕組んでいたのかよ！」

俺は頭を抱える。ダメだこの人。

「そんな」とはいいとして、みんなもう脱いでいいわよ。

脱ぐとは、もがきんぐスケの「」とた

覆面マスク1号がさつそくマスクを脱いだ。

「もー、お母さんなんでこんなマスク被らせてたわけ？息がしづらくてたまらなかつたわよ。」

•
•
•
•
•
フ
!

俺は目を見開いた。

マスクを脱いだ女の子には見覚えがあった。
ていうかさつき見たばかりだ。

雪のような白い肌

針金のように鋭く、ナイーブで透き通りそうな銀髪

気の強そうな眉毛と目

そして、ツーサイドアップ。

・・・・・そう。

保健室で俺の大事なシンボルに上履きを投げつけてきた銀髪美少女
だ。

「あつ。」

目があつた。

「な、な、なんで変態オタメガがここに？」

彼女は目を見開いて、つぶやいた。

「そりやあ、こっちのセリフだ。後、俺は変態でもないしメガネで
もない。」

さつきは、捨て台詞で言つただけだったのでハッキリ言つてやつた。

「はあ？何言つてんの？保健室で私を襲おうとしていたじゃない。
それを変態と言わずして何ていつの？」

な、なんだと！？

「ま、まさか、少年がそんなことをする人間だつたとは…？」

学園長がワザと rajishi リアクションをとりやがつた。

「アンタこな、さつき話したじやないですかーてか、誤解を招くい
い方してんじやねーよー！体育館前で倒れていたお前を誰が保健室ま
で運んでやつたと思つてんだ！」

俺は少し荒々しい口調で言つた。

「だから、保健室に運んで私を襲おうとしてたじやない。保健室の
鍵を閉めようとしたり。」

と彼女の主張。

俺は、あの時のこと思い返した。

確か俺は、保健の先生を呼びに行こうと扉に手をやつたところで彼
女に返り討ちにあつた。

・・・つ！ そつか！

彼女の寝ていたベットからの角度だとちょうど鍵を掛けているよう
に見えたのか。

「違つ！ 俺は保健の先生を呼びに行こうとしていただけだ。」

「どうかしら、言に訳にしか聞こえないわ。」

「じ、じのアマー！ どうも信じてくれそうもない。」

ああ・・・ 真実は何て無力なんだ。

俺がどう説得するか考へていると学園長が

「まあ、落ち着きなさい 亜美。少年はそんなことする子じやない
わ。なんてつたつてまだ女の子の手も握つたこともないチキン野郎
なんだから。そんな子が女の子を襲えるはずがないでしょ？」

「・・・それもせうね。女の子の手も握ったこともないヘタレが襲えるはずないか。」

「グサッ。2度も、2度も言いやがつたよー。母親にも言われたことないのにーー。」

俺のハートがズタズタにされた。もづエロが赤くなっているだろー。

「やうだよ、そりですよ。俺は未だに女の子の手も握ったことないヘタレでチキン野郎ですーー。ごめんなさいねーー。」

履き捨ててやつた。

てか、なんでそんなことわかるんだ？

「それはー、君がヘタチキオーラをかもしだしているからだよー。」

とかわいい美歩先生。また心を読みやがつたな。

つーか、ヘタチキオーラって何だ？（ヘタレとチキンの合せ言葉である）。

・・・・・

「その、い、一応感謝しといてあげるわ。それと勘違いしちゃつてたみたいでごめんなさい。」

素直に感謝されると少し照れてしまつ。

「い、いや、分かつてくれたならそれでいいよ。いつかこのへりおにじに思ってさせてもらつたし。」

「おこしに思つて向よ。」

「いや、抜言だ。気にするな。」

彼女はジト目でいつも見てるのでとつあえず口をせりして知らんふりをした。

なんとか彼女の誤解も解けたよう、まあ良しだ。

第7話 「愉快な仲間たち」

「といつわけで……」

学園長が仕切り直すかのよひ、「ホワイトボードを呂いた。

「さあ、此の衆血口紹介をしたまえよー。」

唐突な切り返しだ。

「あの、いひつて担任から先にするもんじやないですか？」

俺が冷静に聞き返した。

「わうね。じゃあ……私は 星沢 椿ほじなわ つばき これからよひじへね。」

・・・・?

「あの学園長。俺の話聞いてました？学園長の紹介じゃなくて、担任の紹介をもらいたいんですけど。」

「ん？少年も私の話聞いてた？これからよひじへつて呂つたでしょ

う。」

ま、まさかー。

「学園長が担任なんですかー！？」

「そゆこと。」

はあ～。学園長が担任っていうと大丈夫なんだろつか。
ていうか、俺のスクールライフが危機なのでは？

「そして、副担任が桂木先生」

そつ言つて、桂木先生を指さした。

「は～い、保健の先生で副担任の 桂木 美歩です～」

とこれまた可愛く自己紹介をした年齢詐称先生。
なるほど、だから学園長室に案内してくれたわけか。

「それじゃあ、次は覆面マスク～」
と 亜美 自己紹介して。好きなものとか言つていいわよ。」

と言わると銀髪美少女は身だしなみを確認してから口を開いた。

「私は 星沢 亜美よ。好きなものは特にないわ。これからよろしく。」

と言つて軽く会釈をした。

・・・？

「あれ？ 確か学園長も星沢でしたよね？」

と俺。

「やつ、亞美は私の娘よ。」

なるほど、髪の毛の色一緒にすもんね。しかもやつも「お母さん」とか言っていた気がする。俺は一つの疑問に行き着く。

「学園長若こですよね。一体、何歳なんですか？」

「あら、おだてても何も出ないわよ。女性に年齢を聞くなんてデリカシーがないぞ、少年」

とウインクされた。

本当に何も出なかつた。

「何、娘の目の前で母親 口説いてんのよ 変態。」

と銀美女こと星沢さん。

「な、変態じゃない。単なる好奇心で聞いただけだ。」

と俺は反論した。

「あら、うれしい。私に興味があるんですつて。」

と学園長。あー、めんどくせー。

「もついいです。次行きましょつ。次

と俺が言つと

覆面マスク2号がマスクをとつて顔を表した。

健康的な小麦色の肌。

髪は赤く、長い後ろ髪は少し長めの黒いリボンでくくられたポーテール。

しつかり引き締まつた脚。見るからに体育系。顔は凛としい。

「あたしは、駿河するが 茜あかね 好きなものは肉だ。 ようじく！」

と元氣のいい挨拶をしてきた。

「好きなものの肉つい、どこのゴム人間だよ。」

ヤベッ、思わず口に出してしまった。

「ゴム人間？失礼な！あたしは、悪魔の実を食べるなら絶対メラメラの実だ。」

「な、なんで？」

「そんなの肉があつたら、その場で焼けるからに決まつてるじゃないか！」

なぜか誇らしげだ。

なるほど、上手に焼けましたつか。

「そうだね。それは画期的だね」

俺は適当に言つてみた。

「やつだらう、やつだらう。あたしは天才だからな。」

といつてニッと笑ってくれた。

まあ、笑顔は天才的だな。

そんなことを思つているとスネを星沢さんに蹴られた。

「何ニヤけてるのよ。キモいわよ。」

「いみへー」

俺は顔を引き締め直した。

「じゃあ、次 覆面マスク3号と4号」

と学園長が言つと

3号と4号が同じタイミングでマスクを脱いだ。

そこに現れたのは小柄な2人の少女だった。

1人は、金髪で髪の右側を白い球付きのゴムで結んでいる
いわゆるサイドテールつていうやつだ。

さらに、頭の上には 白いウサ耳がつてている。

目は優しく、まるで天使のようだ。

もう1人も大体一緒だが、違うところと言えば
髪の左側を黒い球付きのゴムで結んでいることと
頭にのつてているのがウサ耳ではなく、黒いネコ耳といつといつだ。
そして、右目に眼帯をしている。

さつきのウサ耳少女とは対照的に

田は少し吊り目で 小悪魔系といつたといつだらうか。

「わ、わたちは、ひべのえるるでしゅ。よ、よれりゅくおねがいしましゅ。」

とウサ耳少女。

何て言つていたのか理解しがたい。

「落ち着いて。深呼吸してもう一回やろうね。」

と学園長が言つと、ウサ耳少女は深呼吸を一回してまた口を開いた。

「す、すみません。私、緊張しちゃつて。えへへ」

そう言つて自分の頭をポンと叩いた。うん、きやわいー！

「私は、姫乃、惠流です。よ、よろしくおねがいしましゅ。ち、ち
なみに私が悪魔の実を食べるなら、一キュー二キューの実です。」

好きなものはずが、いつの間にか食べたい悪魔の実になつていてる。
しかも、これまたマニアックなのが来た。

二キュー二キューの実とは、手のひらに現れた肉球で触れたものを弾き
飛ばしたりする能力を得ることのできる実のことだ。

「なんで、一キュー二キューなの？」

俺がそう聞くと、ウサ耳姫は目を輝かせて

「だつて、だつて、いつでもどーでも肉球触りたい放題じゃないで
すか！」

・・・・話が見えない。

「じ、じぬ」と？

とぼけた声で聞き返す。すると

「恵流は・・・肉球が・・・大好き・・・なの。」
ともう一人のネコ耳少女が答えた。

「そ、うなんですよ。私、肉球が大大大大大好きなんですよ！ ていうか
愛してます。肉球の香ばしい香りでご飯3杯いけますね。」

ウサ耳姫、カミングアウト！

「そ、そ、うなんだ」

と俺。ニキューをそんな感じで利用するのは君くらいだよ。
俺はネコ耳少女の方を見る。

「私は・・・姫乃 依夢・・・よろしく。悪魔の実なら・・・カゲカゲ
の実・・・ミミミミの実・・・ホロホロの実・・・どれにしよう？」

ネコ耳姫は、そう言って首をかしげる。
といふかその悪魔の実のチョイスだけでいろいろと、この子の根暗
つぶりがわかつてしまふ。

「迷うな・・・じつじよつ・・・」

本気で悩んでいるらしい。

・・・・？

てこうか セつき姫乃って言った？

・・・・・

「も、もしかして君たち姉妹？」

俺が聞くと

「そうです。」

「そう。」

2人同時に答えた。

「しかも、私たち双子なんですよ。」

そう言って、ウサ耳姫がニッコリ笑う。

そういうえば、髪型も一緒だし顔たちも似ている。
こんな可愛い双子がリアルにいるとは思わなんだ。
双子なんて幽体離脱する奴ら くらいしか思いつかない。

「じゃあ、次は覆面マスク5号 いつてみよう！」

と学園長が元気よく言った。

バサツ！

5号は勢いよくマスクをとった！

・・・・・

はあ～

ため息を1回した。

「もう、マスクネタはいいんだよ！なんでマスクの下にマスク！？
キン肉マンか！」

俺のす「ぶるツツ「ミが炸裂！
だつて、しようがないじゃん。

「ともだちマスク」の下にハットリ君のお面だぜ？
もつ、20世紀ネタもマスクネタも勘弁してくれ。

「ふふ・・・

・・・ん？

「うふふふふ

ハットリ君が笑い出した。

「「みんなに気持ちの良いものなんですね。ツツ「まれるといつのは。

」

そう言つてお面をとつた。

「「みんなさい。学園長にこれをつければ、面白いものを見れると言われたので。」

俺は学園長を二ラんだ。

くわ、笑いをこらえてやがる。

しかし、これまた偉くかわいい人が出てきたな。

桜色の髪にストレートロングで前髪をピンで止めている。
後頭部には大きな赤いリボンがある。

ニコリと笑つていて感じ良さげだ。

しかし、俺は知つている。

常時笑顔の奴ほど怖い奴はない。

「私は 多田羅 たたら 笑咲 ヒカル よろしくね。好きなものは 他人の不幸か
しら。」

ん?今、何やら人としてアウトな発言を聞いた気が・・・
まあ、幻聴だろ?。

「ちなみに、悪魔の実を食べるならメロメロの実かしらね。」

メロメロの実とは 相手をメロメロにし、石にする事が可能になる
能力を得ることができる実のことだ。

「理由を聞いてもかまわないかね?」

俺が問う。

「理由なんてないわ。ただ、私にかしづくものを全力で見下せるじ
やない。」

ただ、笑っている。

まさか、こんな可愛い子が残念な感性をもつているとわ・・・
恐ろしい子! 」

「そ、そですか。」

たぶん今、笑顔が引きつっているだろ?。

「大丈夫ですか?顔色が悪いですよ?」

「だ、大丈夫。すごぶる元気だよ。」

何考えているかわからん。

「これで、みんな終わつたかな?」

と学園長。おい、待て。

「まだ俺がしてませんよー。」

と黙つと

「あー、せうだつた そうだつた。このせつせからチョコチョコ「
るさいのが 轟^{とどき} 刹那^{せつな}君。女の子の悲痛な表情と悲鳴が大好きよ。
よろしくね。」

と学園長が言つと、みんな一斉に引いた。

「な、学園長ーあることないと言わないでトセーーみんな信じち
やつてるじゃないですかー!」

と俺は叫んだが

「本当に鬼畜だつたなんて・・・

「外道めー。」

「怖いです。」

「・・・恐ろしい子。」

「女の子みたいな名前なのにね。」

・・・・・

「ま、待ってみんな、俺がそんな奴にみえるか?」

・・・・・

「見えるわ。」

「見えるな。」

「見えぢやこます。」

「・・・無論。」

「女の子みたいな名前ですものね。」

・・・あれ?おかしいな。目が湿ってきたぞ。

しかも、最後の奴 明らかにワザとだろ。

俺が落ち込んでいると ポンポンと

学園長が肩を叩いて、うなずきやがった。

「あんたのせいだらうがー。」

俺の嘆きが教室中に響いた。

「まあ、今のは[冗談として。本当は女の子の手も握れないヘタレなチキン野郎です。仲良くしてやつてね。」

学園長はさう言つと、俺に挨拶しようと田で会図した。

「轟 刹那 です。なんていうか、ようじくお願ひしますよー。」

頭を下げる。

すると、拍手が聞こえてきた。

顔を上げる。

みんなが笑顔で拍手している。

俺の目がまた潤ってきた。

そして、

『女の子みたいな名前だね』

とみんなで一齊に声を合わせて言つてきやがつた。

「女の子みたいな名前言ひなーーー！」

なんなんだコイツ等は？

打ち合わせでもしていたのか？

俺の声が教室中に轟いた。

第8話 「RPGな世界へようこそ！」

すさまじく疲れる自己紹介を終えると

俺たちは席に着く。

俺の席は窓際で温かい日差しが差している。

朝からバタバタしていたせいか席に着くと眠気が襲う。

俺の隣に銀美女こと 星沢 亜美。

ほじさわ あみ。

星沢

あみ。

俺の隣に赤髪ボニーこと 駿河 茜。

するが あかね。

駿河

あかね。

俺の後ろに腹黒リボンこと 多田羅 笑咲。

たたら じょう

多田羅

じょう。

多田羅の隣にウサ耳姫こと 姫乃 恵流。

ひめの える

ウサ耳姫

ひめの。

姫乃

えむ。

恵流。

その隣にネコ耳姫こと 姫乃 依夢。

ひめの えむ

ネコ耳姫

ひめの。

姫乃

えむ。

依夢。

このウサ耳とネコ耳は、双子の姉妹なんだそうだ。
まるで小さな塾の教室みたいな机の並びだ。

普通の教室の広さに机が6つしかないと
教室が妙に広く感じる。

「じゃあ、自己紹介が終わつたといつて この学園のことについて
話しましょつか。おもに遅刻した誰かさんのために。」

と学園長。返す言葉がない。

「この私立聖魔璃亞学園、通称 魔璃学は、この世界の魔術師教育
施設よ。」

何言つてんのこの人？

・・・・「はあ？」

「あの何言つてるんですか？魔術師？どゆこと？」

まあ、当たり前の反応だろ？。

俺は周りを見渡す。みんな驚いていない。

「あ～、そ～か。少年は何も聞かされてないんだっけ。ということは、ムンド、の存在も知らないのね・・・」

ムンド？なんだそれはボンドの親戚か何かか？

「ムンドって何ですか？」

俺が聞く。

「ムンドってこいつのはね、この現世とま違つもう一つの世界のことよ。あなたたちの世界で言つ、魔法世界みたいなものかしら。魔法世界つて言つても怖くないし平和な世界よ。」

頭の中が？だらけだ。そんなアニメや漫画の中だけの世界を信じる
とでも？

「うふうと、お母さん。なんでコイツ ムンド 知らないの？」

星沢が俺を指をしながら言つた。

「えつとね・・・亞美、落ち着いて聞いてね。少年は・・・魔王
、かもしれないの。」

空気が凍つた。

『ま、魔王！？』

俺を含めた6人が一斉に声を上げた。

ちょっと、待て。魔王？

俺がか？さつきから何言つてんだこの人は？

俺は魔王よりも勇者の方が好きなんだよ。憧れてるんだよ。・・・

ではなく！

魔術師だの、魔王だの。

とつとつ、左脳が爆発でもしたのか？

「ま、魔王つてあの魔王？」

星沢さんが目を見開いている。

「ありえないわ。魔王の血族は、1000年前の戦争で途絶えたはずよ。」

何の話だ。戦争？

「そう。1000年前の戦争で途絶えたはずだつた。けど、魔王の血を持った子孫は何とか生き延び、この現世で行き続けていたのよ。」

「・・・・・・

「あの、何の話をしているんですか？」

「コイツが魔王？笑わせないでよ。こんな奴が魔王ならピッコロな

「こ、なんて大魔王じゃない。」

「こ、セリ、ピッコロは大魔王だよー。」

「セリ、ヒーヒーと、セリヒーの変態が魔王なんてありえないわ。」

「セリヒーとだよーてか、変態でもねーし。」

漫才をしているみたいだ。

「でも、私も信じられないです。轟さんが魔王だなんて。」

とウサ耳姫。

「・・・私も・・・信じられない・・・

続いてネコ耳娘。

「あたしも。」

「私もですわ。」

駿河も多田羅も黒口回音のようだ。

「よし、分かった。それを証明しようじゃないの。」

そういうと学園姫はポケットからアイフォーンひきものを取り出した。

「スペル・オン 証の剣。」

アイフォーンに向かつてそづりをつと、急に光出しアイフォーンの中から白い刀身の剣が出てきた。

「なつー。」

俺は驚きを隠せない。最近の携帯はこんなこともできるのか。

「これは～アイフォーンじゃありませんよ～」

と桂木先生かつらぎさんが言った。

「これは、アルタゴと書いて現世とマンドをつなぐデバイスみたいなものです。これ自体が魔法陣の役割をなしていて 後は、改めてインストールしてある魔法陣に呪文を唱えるだけなんですよ。」

よく分からんが、一々魔法陣を書かなくてもすむ画期的なものらしい。

冷静に整理できてしまつ自分が恐ろしいが。

「じゃあ、どうやってそのアルタゴとやらから剣を出したんですか？」

「これはね～物質召喚アプリを使つたんですね。あらかじめインストールしていた物を瞬時に出すことができるのです。」

「アルタゴができるから本当に楽になつたわ。ひと昔前何て、紙と

「ペンが必須アイテムだったもの。」

「俺が想像していたより魔術師とやらばざいぶん現代的なようだ。
すごいなー。って、感心してる場合じゃない。」

「え、えへへへー！マジでそんなことができるんですかー！」

「今、田の前で見たじゃないの？」

と学園長に冷静に返された。

「でっ、お母さん。その剣でどうするの。」

「亞美も魔法学校で最初にしたでしう？適性検査。」

「適性検査？何の？」

「それって魔王の適性も分かるの？」

「勇者の適性が分かるんなら魔王もできるでしょ。」

「勇者？」

「・・・せつかもね。私のことも分かったんですね。」

「・・・」

「あの、せっかから言つている適性って何ですか。」

「俺が口をはさむ。」

「えっと、ムンドでは魔法学校に入つたらその人の魔法がどういう系統に属しているかを見極める適性検査があるの。適性は基本的に5つあるわ。1つ目は、物理攻撃に特化し、戦士。2つ目は、回復魔術に特化した、白魔術師。3つ目は、攻撃魔術に特化した、黒魔術師。4つ目は、精靈を扱い回復魔術も攻撃魔術もある程度使える、賢者。そして、最後に聖剣を扱うことができ物理攻撃も回復魔術も攻撃魔術もできる、勇者。これらの適性によって自分の習うべき魔法系統が変わつてくるの。」

「ほーう。なんかどつかのRPGみたいだ。しかし、俺はまたもや1つの疑問に行き着く。

「さつさく、星沢が自分のことも分かつたつて言つてましたよね？星沢は何の適性なんですか？」

「私？私は勇者の適性を持つてているわ。後、私のことは亞美でいいわよ。紛らわしいから。」

「えへへへ。いやいや、それはないでしょ。こんな暴言吐きまくる勇者なんて・・・痛つ！いたいたたた！」

ヘッドロックを食らつた。

「痛いです！痛いです勇者様！」

俺の頭蓋骨が変形しそうだ。が、放して欲しくない。なぜならば！俺の左側の頭部に温かくとも柔らかいモノが当たつているからである！

「亜美そのくらいいじしておきなさい。それ以上したら少年の頭がかしくなってしまうわ。それに、亜美の立派なお胸が汚れるわよ。」

「あやつー。」

亜美は、頬を赤らめると口ひびきを解除していたを見ただ。

「い、いの、変態ー。」

「ああ？変態？俺のどじが変態なんだよー。」

「鼻から血が出ていたのがよ。」

「へ？」

ホントだ。鼻血だ。

「アレ？あーそつが今日の朝にチョコレート大量に摂取したからなー」

今日の朝にそんなことをする余裕はなかつたがな。

「2秒で分かる嘘はつかない方がいいわよ。アンタ朝、寝坊したでしょう。」

な、なんで知つている？

「アンタの頭、寝癖だらけよ。」

ふ、不覚だった。

・・・・・・・・

「はあ～、もう一回。そんなに信じられないなら、。証明してあげるわよ。」

そういうとポケットから黄色いアルタゴを出した。

「リベラーション。」

何か呪文げなことを言つたまゝ、アルタゴが光出し魔法陣が亞美の体を包んだ。

光が一閃した。

・・・・・

眩しかつたためつむつた目を開ける。

・・・・・！

そこにいたのは、鋼色の鎧に身を包み赤いマントを纏い、頭にはティアラがのつていて、胸の真ん中には黄色いクリスタルがある。所々、露出している雪のような肌が妙に眩しい。そう。そこにいたのは紛れもなく・・・勇者。

「な、何よ。あんまりジロジロ見ないでよ。恥ずかしいじゃない。」

俺は口をポカンと開けていた。

「俺は口をポカンと開けていたんだ？亞美が一瞬にしてコスプレしたぞ！」

「今アンタ、コスプレとか思わなかつた？」

「あ、思つてない思つてない。」

やけに、鋭いじゃないの。

てか、よくアニメであるあれか？光が体を包んで変身的な。
ちくしょーーーサングラス持つておけば良かつた！

「どう？これで信じた？」

「信じるも何も、ただコスプレしただ・・ゲハッ！」

殴られた。

「だから、『コスプレじゃな』って言つてるでしょーーーこれは聖装な
のーーれで普段は使えない強力な魔法や抑えている身体能力を解放
できるのよーーー」

「へへへ。冗解みたいなも・・アベシッーー！」

無言で殴られた。

「でも、やっぱ信じられん。なんか魔法使えねーの？火出したりとか。」

「やつね。じゃあ、見せてあげるわ。」

そつぱんとタルタルを構えた。

「スペル・オン 勇氣の聖剣 サント・ヴァラー！」

すると、アルタゴから神々しい光とともに剣が現れた。

白銀の刀身に三つ又の切つ先。

柄は真っ白な羽でできている。

握りは黒く、一番下には金色の鎖が付いていた。

見た目はまさしく・・・聖剣。

「これ持つてみなさいよ。」

俺は言われた通り聖剣を握った・・・が

聖剣は俺の手の中からなくなっていた。感触もない。

「じゃあ、私に渡してみて。」

亜美が手を出してきたので俺は亜美の手の上で手を放した・・・すると

なくなつたはずの聖剣が亜美の手のひらに乗つかった。

「聖剣はね、勇者にしか触れる」ことを許さないのよ。」

・・・・・

「どう? 今度こそ信じた? 普通の人間なら一生見られない代物よ。感謝なさい。」

俺は、普通の人間のつもりなんだがな。聖剣を持った亜美は勇者そのものだ。

「ああ、信じたよ。こんなもんが本当にあるなんてな・・・」

田の前で見てしまったのだ。信じるしかあるまい。

「じゃあ、一通り説明が終わったところで早速だけど少年の適性検査を始めるわよ。」

と学園長が仕切りなおした。

俺にもこんなことができる力があるというのか？
バカバカしい。そんなことがあるわけない・・・。
でも、俺にもこんな力があつたら・・・。
やめとこつ。期待するだけ無駄だ。
俺はいく普通の高校1年生なのだから。

第9話 「I am 魔王」

適性。

それは、魔術師にとつての1つの称号みたいなもの。適性は基本的に5つある。

「戦士」、「白魔術師」、「黒魔術師」、「賢者」、そして「勇者」。

しかし、俺が今から証明されるであろう適性は・・・「魔王」だ。ダメだつて！パーティに魔王を加える勇者がどうにかいる？

結局、集団リンクでゲームオーバーなんだよ！

・・・・・「ホンっ

失礼、取り乱してしまったようだ。

というわけで、普通の人間であるはずの俺の適性を暴き出すというアイテムが

「証の剣」だ。

「証の剣」も1つの聖剣なんだだそうだ。

よつて、適性検査は神聖な儀式ということになる。

神聖な場所で行わなければならない。

そう学園長に言われた俺は、教室からみんなとともに出了。教室から少し行ったあたりに1つの部屋があった。たぶん特別室だろう。

扉には横文字の英語で何か書かれている。

「サクレド・・ローム？」

「バカ。シークレットルームよ。ルームくらい読めなさいよな。」

「轟はバカだな。あたしなんかシークレットをえ読めれば全部読めたぞ。」

亞美と駿河が冷かしてきた。

「バカバカ言うんじゃねーよ！俺はなサムライだから英語読めなくていいいんだよ！ラストサムライなんだよ！駿河に至つてはルームしか読めてねーじゃねーか！」

そうだ！俺の人生に英語なんてノープロブレム！

「ふふっ・・・・自分のことラストサムライですって。中一病 甚
だしいですわ。」

「・・・苦笑。」

「ちょっと痛々しいです。」

続いて俺のラストサムライ発言に便乗して 多田羅、姫乃姉妹に冷
かされた。

「なつー。」

何も言い返せない。

自分の言葉には責任を持つと。俺は心に誓つた。

「アンタたち静かになさい。仮にも神聖な儀式を行う部屋の前なの
よ。」

学園長に注意された。

こんなに真剣な学園長を見たことがない。
まあ、会つてまだ1時間と半分くらいだがな。
ガチャツ。

学園長がドアを開ける。

俺たちはドアの闇へ吸い込まれていった。

・・・・暗い。

電気のスイッチはどこだ？

俺は手探りで壁にあるであろうスイッチを探す。

こつちかな？俺は反対側の壁に手を伸ばす・・・

・・・ムニコ・・ムニコムニコ・・

何だこの柔らかい感触は？

ムニコムニコムニコ・・

「ライト」

学園長の声が聞こえたと思つた瞬間、視界が明るくなつた。

・・・・・殺氣！

俺はさつきから手に伝わつてくる感触が何か確かめるために自分の手の方を見る。

「はつ・・・・ははは。」

俺、死んだな。

俺のハンドは見事に亜美の胸をキャッチしている。

これ！このいけない手め！早くそれをお放しなさい！

ムニコムニコ・・

「い、いつまで掘んでるのよ、この変態ー！」

殴られ蹴られを × 2

「なんていうか・・電気のスイッチを探していたら亜美の激怒スイッチを発見してしまいました。」

「つまらないわよー」

「ほんとすみませんでした!」

俺は亜美にボロボロにされた上に正座をやらされていた。

「口クなことをしないラストサムライですわね。こんなサムライ滅んだ方が世のため女子のためだとは思いませんか?」

「・・・・・同感。」

「轟さんは、女子の敵なのです!」

「腕の一本くらいい折つていいんじやないか?」

とんだ汚名だ。

「だ、だから今のは事故なんだって!不可抗力なるものだ!」

全員ジト目で俺を凝視している。

殺される!視線によつて殺されてしまつ!

「もう!ホントいい加減にしなさいよアンタたち。ここは神聖な場所だつて言つてるでしょう。」

学園長にまた怒られた。

「だつて、この変態が私の む、胸を…」
と亜美淚田 ver。

「しょうがないでしょ。男はみんなオオカミ。少年もラストサム
ライとは言え、結局… オオカミなの。」

・・・・・

「いや、やめてくれるー。」の残念な空氣！ ていうか、いつまでラス
トサムライ引かずつてんの！」

「何よ、ラスト変態。爆発しなさいよー。」

「ば、爆発は酷くねつ…? しかも、ラスト変態つてなんだよー。」

「はいはい。漫才はいいから、もう準備できたわよ。少年、こっち
来て。亜美たちはそこにいて。」

学園長のおかげで俺のセクハラ行為が帳消し… になつそうにな
い。
亜美がこっちを睨みつばなしだ。

俺がセクハラ(?)をしてしまつていた間に準備を整えていたよ
だ。
部屋の真ん中にはテッカイ魔法陣が描かれている。

魔法陣の周りには青い炎が浮いている。

ひ、人だま！？

「大丈夫ですよ。これは霧囲気をつけるためのものだから人だまじやないですよ。熱くもないですしね。」

と保健のJKT（チビッ子ティーチャー）。
ホントだ。熱くない。てか、今 霧囲気とか言わなかつた？

「少年。」の手袋をして

何やら分厚い手袋を渡された。

「これは？」

「その手袋しないと聖剣に触れられないから。」

なるほど。勇者以外に触れる」とを許さないんだっけ。
言われるままに手袋をした。

「じゃあ、これ持つて魔法陣の中に入つて。」

証の剣を差し出された。

「」なんでビーブるん・・・で・・・す・かつー。」

お、重い！

「ちょっと少年。気張りなさい。落としちゃダメだからね。」

「や、そんな」と言つたつて・・・」

お忘れじゃないだろ？「か。俺の基礎筋力が皆無である」とを一

俺は何とか両手で持つと、魔法陣の真ん中に立つた。

「始めるわよ～。」

「は、は～い。」

俺が返事すると静寂が訪れる・・・

「聖なる剣よ。汝の証をここに示せ。汝の光の道となれ。・・・」
ルーバ。「

学園長が詠唱をし終えると魔法陣が光りだした。
そして、「証の剣」の白い刀身が光出し
次の瞬間、光が弾け飛んだ。

・・・・・

目を開ける。

「な・ん・・・だと?」

白い刀身があつたはずのところに何もない。
正確に言うと

握りや柄はあるのに刀身だけがない。

どういうことだ?

何もないということは、俺には何の適性もないということなのかな?

それはそれで、嬉しいような嬉しいような。

「やつぱりね。」

学園長の声がした。

「やつぱぱつてどつこつ」とですか?」

俺が問うと、少しの沈黙が訪れる・・・

「轟
刹那、あなたの適性は・・・魔王、よ

・・・・・へ?

「な、なぜですか? 何も起こらなかつたじゃないですか?」

「何も起こらなかつたって、起こつてるじゃない。」

起こつた? 何が?

「この証の剣はその人の魂と共に鳴しあつて適性を証明してくれるの。魂のことをマンドは魔力の単位として、アルマ、と呼んでいるわ。そのアルマの種類によつてさまざまなかつた形や色に刃が変わるの。例えば、‘戦士’なら刀身が赤く燃える。‘白魔術師’なら刀身が黄色く光る。‘黒魔術師’なら黒い霧が刀身を包む。‘賢者’なら刀身がグニャグニャに曲がる。そして、勇者なら刀身が真っ白な羽になる。という感じで刃が変化するのよ。」

俺のこの手にある証の剣は、今 説明されたどの反応にも該当していない。

ただ、刀身が弾け飛んだだけ。

「じゃ、じゃあ、Iの反応は何なんですか？」

証の剣を見下ろす。

「……魔王の適性を示す刀身の反応は……」

学園長がそつと俺の手にある剣を指した。

「刀身がぶつ壊れる。」

「なつー。」

刀身がぶつ壊れるだと？

そんなことがあり得るのか？

「Iの反応は何も、証の剣だからだけじゃない。……魔王は触れた聖剣をすべてぶつ壊すのよ。」

・・・・・

「で、でも、勇気の聖剣、の時は何もなかつたじゃないですか。」

「もともと、聖剣は勇者以外には触れることができないの。でも今、少年がしている手袋は特殊な加工がされていて聖剣に触れることができるわ。聖剣に触れることができなければ何も起きないのよ。だから、この儀式をするときはその手袋をつけなきゃいけない。」

「つまり、勇気の聖剣、のときは剣に触れられなかつたから何も

起じしなかつたってことですか？」

「やむ」と。

なんてこつた。

マジで俺が、魔王、といふことなのか。

「ムンドではその聖剣を破壊する魔王の力のことを、エスパダ・ロンペル、（聖剣壊し）と呼んでいるわ。」

「エスパダ・ロンペルですって？ その忌まわしき力は、1000年前の戦争で魔王の血とともに途絶えたはずでしょう？」

亜美が驚きを隠せないよつて言つ。

「わざも言つた通り、魔王の子孫はこの現世で生きていたのよ。・・・そして、今から20年前に1人の、魔王、がムンドに帰つて来たわ。名前は・・・轟 武蔵・・・」

「轟？」

俺が呟く。

「そう。あなたの父親よ。」

俺の父親だと？

「魔王は子孫が途絶えると滅びる運命。魔王の適性はあなたのお父さんにも引き継がれていた。魔王の適性は代々引き継がれていくも。だから、あなたのお父さんは、あなたにも託したはずよ・・・」

魔王の証を。」

俺の父親・・・・・っ！

「ぐつー！」

何かが・・何かが頭の中を横切ったかと思つと
激しい頭痛が俺を襲い、倒れこんだ。

「ちょっとー少年ーどうしたのー少年ー」

薄れゆく意識の中、みんなの心配そうな声が聞こえる。
・・・そして、俺はそのまま意識を失った。

第10話 「追憶の記憶」

これは、記憶の奥の記憶・・・
俺がまだ小さかつた頃の記憶。

ここはどこだ？

僕が目を覚ますとそこには信じられない景色が広がっていた。
あたり一面が真っ赤に燃えていた。
心なしか頭がズキズキする。

頭を手で触れてみると血がベットリついていた。
なんだこりゃ・・・

目の前には血の付いた蛍光灯の欠片がある。
僕はなんでここにいるんだっけ・・・
そうだ・・・今日は僕の誕生日だから
お母さんとデパートに誕生日プレゼントを買いに来たんだった。
それで迷子になつておもちゃコーナーで泣いていたら、急に爆発
音がして

天井から蛍光灯が落ちてきて・・・

お母さんはどうなつたのだろう？

無事避難できたかな？

・・・

僕このまま死ぬのかな・・・

死んだら天国に行けるかな？

・・・

いやだ！死にたくない！
お母さん助けて！

僕は、声にならない声で泣き出した。

「おっ、何泣いてんだ？男ならどんなことがあっても簡単に泣くもんじゃないぜ。刹那。」

炎の中から人影が近づいてくる。

やがて、炎の中からできたのは1人の男の人だった。

ボサボサな髪にくわえタバコ。

アゴには無精ひげ、小さなメガネをかけている。

黒いマントに身を包み、頭には赤いカウボーイハットをのせていた。

「ヒーロー見参つてか？・・つて、おいおいノーリアクションかよ。」

アンタはアホですか？そのメガネは度が入っていないんですか？見れば分かるでしょう？大けがですよ。大けが。致命傷ですよ。・・・そんなことを初対面で言えるわけもなくてか、今は声が出せないので僕はタダその男を見つめていた。

「おっ。ー頭から血出でんじゃねーか。カツコ^ヒいな。悟飯君みたいだぜ！」

おい。それが怪我人に向けて発する言葉か？

「といつのは、冗談としてよく生きててくれた。ありがとう。すぐ助けてやつからな。」

そう言つと男は僕の近くにしゃがみ込んだ。
包帯を出し僕の頭に乱暴に巻きつけた。

「痛つ。」

「おつ、わりい、わりい。俺不器用だからよ。ちょっとだけ我慢してくれや。」

アンタが優しく巻く努力をしろよ。

痛みを我慢しながらそんなことを考えていた。

包帯を巻き終えると男は僕の顔をじっと見て

「立てるか?」

と聞いてきた。

僕は頭を横に振る。

とてもじゃないが、立てる気がしない。

「そりゃ。」

・・・・・

「なら、俺がオソシフしてやるよ。」

僕は、激しく頭を横に振った。断固拒否。

「痛つ。」

「ほら、無理すんなつて。恥ずかしがることあるよ。ガキは甘

えるのが仕事だぜ。」

少し考えてから僕はうなずいた。

「おっ、その前に。」

もう言つと男は僕の右手の甲に手を乗せた。

「紡ぐは意志を 伝うは魂を 我が道を行かざるは 己の正義のため。『えよ。・・・ポデル・デ・サタナス・・・』

そんなことを男が言つと

僕の右手の甲が光りだす。

そして英語の「S」を力ヶ口良くしたような文字が浮かび上がってきた。

「これがあれば、怪我なんてすぐ治る。コイツは俺からのバースデープレゼントだ。・・・誕生日おめでと。」刹那。

そう言つと男は「ニッ」と笑い、僕をオンブした。

そして、炎の中を歩き出す。

不思議と熱くない。まるで、何かが守ってくれてるみたいだ。
・・・・・

男が言つていた通りだ。痛みがドンドン引いていく。

助かつて安心したせいなのか、それとも男の背中が暖かいせいなのか・・・

僕はだんだん眠くなり、目を閉じた。

「おっ、よく聞いておけ。刹那。・・・復活の呪文は・・・・・・

だ。

その後、俺が田を見ましたのは病院のベット上だつた。俺が目を開けると母さんが泣きながら抱きついてきた。

母さんが言つては、あの爆発の後

俺はデパートの入り口で眠っていたのだそうだ。

その犯人も捕まつたということだった。

「よかつたわね。きつとサシタさんが助けてくれたのよ。」

と言つていた。

母よ。サンタはクリスマスに来るおっさんのことだ。
残念ながらバー・ステーには来てくれないのでよ。
確かに、赤い帽子をかぶつていたがな。

今思えば、あのサンタは

なせ俺の名前や誕生日を知っていたのだろうか
それに、あんなに大きな事件だったのに
一切、テレビに放送されなかつた。
拳句の果てには、デパートは元通りになつていて
あの事件がまるでなかつたかのように人々の記憶から事件のこと
が消えていた。

あの頃の俺は病気がちだったから。そんなこと 자체がどうでもよ

くなっていた。

だから、自然に俺の記憶からも消えていったのだろう。

第1-1話 「カウボーイハットと無精ひげの男には気をつけろ」

「また、あの時の夢か・・・」

俺は目を覚ました。

・・・やつちまつたな。・・・夢落ち。

右手の甲を見る。

やつぱりない。

あの時あつたはずの「S」はなくなっていた。
ていうか、病院で目覚めた時にはもうなかつたんだつけ。
今思えば、俺の運が尽きたのもあの後からだった。
最近になつてこの夢をよく見るようになつた。

・・・「Jはビ」「Jへ私は誰？」

最後のは嘘だ。

俺の名前は 轟 刹那 職業は「魔王」。

今度は本当だ。

今しがた確認してきたところだ。（確認したくなかったがな）

「やつと、目を覚ましたわね。」

目の前にはやけにホリカぶつた天井が広がっている。
俺は上体を起こす。

あたりを見渡すとテッカイ魔法陣が描いてある。

そういえば、俺は適性検査が終わつた後に
急に激しい頭痛に襲われて倒れたんだつけ。

「具合はどう？」

学園長が覗き込んできた。

「あー、もう大丈夫ですよ。」

学園長以外誰もいない。

「ほかの人は?」

「あの子たちなら、先に教室に戻したわ。」

「そうですか。・・・あの・・やつぱり、俺つて・・・」

「魔王よ。」

ですよね。

さつき、剣がぶつ壊れるのを見ちまつてますもんね。

「いやー、無事でよかつたわ。あの後、叩いてもズボンを脱がしても目が覚めなかつたんだもの。」

「なんですよー?」

慌ててズボンを履いているか確認してみる。
良かつた。履いている。

「最後のは冗談だけだね。」

「もひー、おどろかせないでくださいー。」

まつたぐ。どうかしてるぜ。

「あの子たちも心配していたから早く教室に行つてあげなさい。」

「……はい。……あつ、その前に一つ聞いていいですか。」

「何?」

「あの、さつき魔王が20年前にムンドに帰つてきたつて言つてましたよね?」

「え、ええ。」

「そして、その魔王……轟 武蔵とどろき むさしが、俺の親父だつて」とも言つてましたよね?」

「い、言つたかしら?」

「言いましたよー。」

「はい。言いました。すみません。」

「……どんな人でしたか?」

「……あ~。言わなきやダメ?」

「言つてください。」

「……分かつたわ。……20年前突然あの人はムンドに姿を現したわ。このアルタ」とともにね。」

「そつこつと学園長はアルタゴを取り出した。

「そして、交渉をしてきたの。このアルタゴの作り方を教えるから
1000年前に先代の魔王が犯した罪をなかつたことにしてくれ・
・てね。」

「先代の魔王が犯した罪?」

「やう。1000年前の魔王はムンドのとある神殿の奥深くにある
この世界と現世をつなぐ 聖剣 ディオス を壊そうとしたのよ。」

「なんでそんなことを?」

「私にもそれは分からないわ。聖剣ディオスは現世とムンドをつな
ぎ、バランスを保つ役目を持つ強力なアルマの塊。その聖剣を壊せ
ば現世とムンドのバランスが崩れ崩壊する。だから、戦争になった。
そして、勇者とその仲間たちによつて滅んだ。」

「・・・それで俺の親父は、なんで、その罪をなかつたことにしてくれ、なんてことを?」

「それは・・・いやこれは言えないわ。これだけは言つなつて言わ
れてるから。」

「・・・母に言われたんですか?」

学園長は黙つたままだ。

「・・・アルタゴの機能を見て、ムンドの上層部はすぐ許可したわ。

魔法陣を描かなくてすむ画期的なものをだつたもの。そんな100年も前のことなんてアルタゴの性能に比べたらやすいモノ。あの戦争の後に聖剣デイオスのoinてある神殿は厳重な結界によって守られムンドの上層部でも限られた人しか入れないようになつたからね。そして、あなたの父親はアルタゴの開発により功績をたたえられた。それから、ある日ムンドにいた1人の女とともに現世に帰つて行つたわ。次に帰つて時には生まれたばかりの赤ん坊を連れていたけどね。」

そう言うと俺の方を見てニコリと笑つた。
その赤ん坊が俺か。

「じゃあ、その少女が俺の母なんですか？」

「そうよ。そして、その後 赤ん坊と妻を現世に返してあの人は上層部の人の依頼で何かを調査するために旅に出たわ。」

「・・・今も生きてるんですか？ 親父は。」

「・・・わからない。でも、信じましよう。あなたの父親は、そんなに簡単に死ぬ人じゃないから。なんたつて魔王だったんですから。いつもいないし、顔も見たことないからな。」

「

俺の親父は物心ついたときにはもういなかつた。母に聞くたびに外国で仕事していると言われた。成長していくにつれて寂しくなくなつていつた。いつもいないし、顔も見たことないからな。そう思つていたらコレだ。

生きてるかどうかも分からないつてか？
ふざけんな。

「それで・・どんな人でしたか・・・俺の親父は。」

「ほほう。少年はそんなに親父殿のことが知りたいのかね？」

「やけながら言つてくる学園長。

「ばつ、そんなわけないです！・・・ただ俺、親父の顔も見たことないから。」

「はいはい。少年の父親は、なんていうか陽気な人だったわ。いつも「おつ」ていうのが口癖でね。」

「ん？」「おつ」が口癖？・・・つー

「も、もしかして頭に赤いカウボーイハットをかぶつてしませんでし
たかー？」

「んー。あつ、そういうばழンドに帰つてきたときに趣味の悪い
赤い帽子をかぶつていたわね。」

はあー。なんてこひた。まさかとは思つていたが本当にやつだつた
なんて。

しかも、会つたことがあるなんて。

俺の親父。

それはあの事件の日に会つた男だつた。

「さて、結構話しぃんじやつたけど、もつそろそろ教室に戻りまし
ょうか。みんな心配していいるわ。」

「そうですね。」

そんなこんなで俺と学園長はシークレットルームを後にした。

第1-2話 「アレ、本当は飛んだ方が勝ちなんだってさ！」

シークレットルームを出た俺と学園長は
クラス？の教室へと足を向ける。

「学園長。俺、親父にあつたことあるかもしれません。」

「やうみたいね。」

「驚かないんですか？」

「やつきも言つたけど、魔王の適性は受け継がれていくものよ。そして、やつきの適性検査で剣は見事にぶつ壊れた。となると、あなたに会つて適性の受け継ぎをしたと考えられるわ。」

「やつこいえばそうですね。」

そんな会話をしていると教室の前に着いた。

ドアノブを握る。

すると、教室の中から 多田羅たたり と 恵流えりゅうの声が聞こえてきた。

「あつ、やつこはダメなのです。」

「エリですのエリがいいんですのエ。」

「ダ・・・メつ。そんなところに入れちゃ、ダメ・・・です。」

「逃がさないですわよ。私の剣がここ貫くのをよ~く見ておくれ。」

「！」、怖いんです。」

「大丈夫。優しくして・あ・げ・る。」

「きやつー。」

俺は勢いよくドアを開けた。

「あ、あなた方は、な、何をなさつてているのですかー？」

沈黙・・・

「見てわかりませんの？黒ひげ危機一髪ですわ。」

机の上には色とりどりの剣が刺さった小さなタルがあり
床にはミニチュアの海賊が転がっていた。

「へ？黒ひげ？」

黒ひげ危機一髪って、あのタルの中に引きこもつてゐる海賊のオッサン（今年で37歳になる）を剣で刺して、強制的にタルから飛び出させてオッサンの反応を楽しむという極めて悪質なおもちゃのことか？

「その解釈の仕方はタカラトミーさんに失礼だと思います～。」

となぜか人の心が読める桂木先生。

俺は心の中で弁解した。

「轟が倒れてから暇だったから何か面白いことはないかと思つて桂

木先生に言つたら、「戻出されたんだよ。」

「それで遊んでいたら、恵流が海賊さんが可愛そうって言つたらそれを笑咲がからかい始めちゃって。」

「・・・恵流・・・優しい子。」

と 駿河 亜美 依夢が状況を説明してくれた。

俺が倒れて暇だつたつて・・・心配してくれてたんじゃないの?

俺は、心の汗をこじらえる。

「それでラスト変態さんは、何をしていくと思ったのかしら?」

「な、何も。た、楽しく遊んでるな~って。てか、またラスト変態!?」

「やつですか? それにしても鼻から血が出てますわよ。」

「えつ、マジで?」

俺は慌てて鼻に手を当てる。

何もついていない。

「だ、だましたな。」

「いえ、その反応を見れば何を考えていたかなんて一目瞭然ですもの。」

そう言つて多田羅がほくそ笑んでいる。
ちくしょつ。

「何の話をしているんですか？」

「いや、なんでもないなんでもない。」

俺は慌てて恵流の質問を遮った。

「でも、轟さんが無事で何よりです。」

天使の微笑みをくれる恵流。

ああ、何ていい子なんだ。

「適性検査でも少しのアルマを使つわ。だから、急なアルマの使用で体がびっくりしたんでしょう。心配いらないわ。」

そう言ってホワイトボードの方へ歩き出す学園長。

「それにしても、みんな仲がいいんだね。」

「当然だ。あたし達はムンドの魔法学校でも一緒にいたんだからな。」

「

「え、初対面じゃないの？ てか、ムンドにも魔法学校つてあるの？」

「当たり前よ。大体魔法学校はもともとムンドにだけあつたんだから。この魔璃亞学園は最近できただばかりよ。」

「そういえばそうだ。母からこの学園のことを聞くまでこんな学校があるなんて知りもしなかった。」

「じゃあ、なんで現世にも魔法学校を作る必要があるんだ?」

「その間にには私が答えるわ。とりあえずみんな座りなさい。」

そつ学園長に言われ俺達は席に着く。

「「」の学園は表向きは普通の宗教学校だけど、そつさきも少し話した通り魔術師教育施設。・・・そして、「」の現世の防衛機関。」

「防衛機関?」

「「」。」の現世を守るためにあるの。」

「守る?俺はこれまで何の障害もなく生きてきたつもりだがな。

「守るって何から?」

「・・・そんなの決まってるでしょ?・・・極悪超人からよ キリ
つ!」

「いや、なに真剣な空氣を著作権ガン無視とドヤ顔でぶつ壊してんだよ!」

「なんか、真剣な空氣がアレルギーっぽくて。」

「せうだよ。まさしくアンタがエアーブレーカーだよー。」

「もー、少年の「」で空氣がぶち壊しだぞつ。聖剣の次は空氣

をぶつ壊すんですか。この色男つ。

ぐつ。なんなんだよそのノリわ！

感想文

「 というのはジヨークで。・・・最近になつて現世で不可解なムンドがらみの問題が起きてるの。たとえば少なくなつていた魔物の出現が最近になつて多くなつて来たり、通常ならいるはずのない強力な魔物がこの現世に出現したりね。そして極めつけは、聖剣の悪用。それらを解決するためにこの学園は造られた。その中でも、聖剣の悪用。これをメインに解決するのが、この クラス?。」

「うひうひうひ、うひうひと待ってください！」

「なに?」

「なに？じゃないですよ！なに当たり前みたいに魔物とか言つてるんです！魔物なんているわけないでしょ！俺が今まで生きてきて魔物なんかと鉢合わせたりしたことなんて一度もないですよ！」

「当たり前じゃない。そんなRPGの世界じゃないんだから、道端でいきなり襲われたりするわけないじゃない。魔物が出現したら私たちがいち早く反応してひそかに消すの。それでもばれてしまった場合には記憶の消去を行うけどね。」

「そんなの信じられるわけが……」

俺の言葉を遮りどこからか悲鳴が聞こえた。

「ひ、悲鳴！？」

またか！？

とのヤヌベントニアたよ

「あ、大丈夫大丈夫。これ私のアルタゴからだから。」

そういうと学園長はアルタゴを取り出す。

۷۰ پلشی

とくに、おとづれの音はしてゐた。

「いや、タイミング良すぎだらう。」

「ホント、グットタイミングだわ。そんなに信じられないなら今から魔物の討伐についてきなさい。いいオリエンテーリングになりそうだわ。」

魔物の討伐？

本気で言ひてんの？

「ま、魔物の討伐つて今からですか?」

「やつ今から。」

「で、でも・・・」

「なに？変態怖いの？」

亜美が嫌味っぽく言つてきた。

「じょ、冗談言つちやーいかんよ、お嬢さん。これでも俺はね、ネットゲーム界の白い魔、って呼ばれて頼られてるんだから。しかも、変態じやねーし。」

「じゃ、問題ないわね。行くわよ。」

やつは亜美は学園長とアイコンタクトをした。
それから、学園長がアルタゴを構える。

「ムーブメント・オン 商店街へ。」

魔法陣が俺たち8人を囲む。

「往生しなさい。少年。」

「ちよ、ちよと待つた！待つてください！俺まだ心の準備が！」

学園長のウインクとともに俺は光に包まれる。
そして、光とともに弾け飛んだ。

どうなるんだ！俺！

第13話 「学園の意味、クラス？の意義」

俺は叫んでいた。

なせたは、俺は今、空を飛んでいるからである。正確に云つて落ちている。

「うう。アラマダーヴィー、か……」

「なんで、落ちてんの――――――?」

俺の体は重力に従うまま、ただ落ちる。

そんなこと言つてる場合じゃない。

なせた？なせ俺に落ちてしまふ？

さき先に食事相手が復

今度はタイフだと？

そのへりこ最悪かとこうと

「一ヒー カップに乗つて、もうグンルングンルン回した後に

少し休憩をとるためにコーラを飲むとする。

即行で垂直落丁式のジップトートバッグスターに乗つ

だらだら、説明したが簡単に言つとす「じぶんの気持ち悪い。

洗濯機の中に放り込まれる洗濯物は

いつもこんな気分なのだろうか。

俺が洗濯物に同情していると学園長がまたアルタゴを構えだした。

「エクスプローション・オン」

アルタゴから魔法陣が飛び出だした。

その魔法陣がだんだん大きくなり商店街であるうつ場所を囲み。水色の膜が商店街を包んだ。

そんなことよりどうやって着地すればいいんだ！？
俺は筋斗雲なんて持ち合わせていないし
舞空術だってできないんだぞ。
どんどん地面が近づいてくる。

「掴まつてください。」

惠流の一言で俺は何も考えずに言われるまま惠流に抱きついた。

俺を含む8人の急激な落下が和らいだ。
そしてそのまま柔らかく地面に着地。

「た、助かったよ惠流。ありがと。」

俺は礼を言った。

すると、惠流は少し顔を赤らめた。

「どういたしまして。・・その・・・轟さん？」

「何?」「

「…かいです。」

「何て言つたの?」

「だ、だから…顔が近い・です。」

「えつ?」

俺と恵流の顔はもう少しで鼻がくつ付きそうなところにあった。

「うへ、じめん! いろいろありすぎて氣づかなかつたよ。」

俺は慌てて恵流の体から離れた。

それにも、近くで見ると強烈な可愛さだったな。

「い、いえ。少しひくりしただけですから。」

さつきより顔が赤くなつてるけど大丈夫だろ? か。
危なかつた。

小さい子に抱き着いてるところを他人に見られたら…・・・

「まるで、小さい子供が大好きな変態にしか見えないわね。」

「つおつー。」

亜美がジト目で見ている。

「うへ、誤解だ! 恵流が抱まつてつて言つてくれたから慌てて捕まつ

たら抱き着く感じになつただけだ。」

「ふうん。」

視線が痛い。

「そつときの光景を写メしてネット上にまき散らせば社会から抹殺できそうですね。」

「ま、まさか、本当に写メしてないよね?」

「あいにく、今日は持ち合わせてませんでしたわ。」

多田羅の脅迫じみた発言に怯えつつあたりを見渡す。

ここはよく買い物に来る商店街だ。

野菜や魚や肉がそこらのスーパーなんかじゃ比べ物にならないくらい安く手に入る。

ちょっとした主婦の知恵だ。

だが、今日は妙に変だ。

いつもなら、メチャヤ賑わっている商店街なのに

今日は誰の姿もない。

それどころか店は開けっぱなしなのに店員がない。人の気配もない。

どういふことだ?

「人除けの結界を張つたからです。」

「人除けの結界?」

「さつき、シッキーが何かしてたでしょー？あれば、囲んだ範囲に人が来ないようする結界を張ったのですー。」

「あの水色の膜のことですか？」

「やうですー」

俺は桂木先生の心が読めるスキルを気にしなくなつたようだ。

「ていうか、やつもの何だつたんですか？」

「さつきのつて、ムーブメントのこと。あれば行きたい場所の座標を特定して最短で移動することができるアプリよ。」

「アンタの商店街の場所は空なんですか？」

「何言つてるの？空から落ちないと結界張れないでしょー。あ痛つ。何するのよ垂美。」

「お母さん」を何言つてるのよ。別に空から落ちなくても結界は張れるでしょー。ムーブメントが苦手ならそういう言葉ばね。」

「そんなこと言えるわけないでしょー。これでも学園長なんですか

「」

誇りしげに言つことではない。

それに自分でこれでもつて言つたりやつたよ。

「そ、それで魔物とやらねばい？」

「・・・・・来る・・・」

「どじから?」

「・・・・・そじ・・・」

そう言つと依^{えむ}夢は道路の真ん中を指さす。

「セヒつて・・・なにもいないじゃ・・・」

バリツ!

「な、なんだ!」

空氣中に亀裂が入つた。

バリバリバリツ!

どんどん亀裂がデカくなつていぐ。

バリンツ!

何かが割れたような音を出し空氣中に黒い空間が現れた。
なんだ・・・これは?

「ヴォー!」

空間の中から何かの雄叫びが聞こえてきた。
それから空間の枠を掴んで黒くデカい手が現れる。
だんだんその黒い奴の姿が現れていく。

「つー」

「、『イツは！？』

牛の頭に人の体の怪物。

体は黒く、鼻息は荒い。

体長は2メートル以上あるだろ？

手には釘の刺さったこん棒を持っている。
まあしく・・・

「・・・・・ミノタウロス・・・」

冷静な反応を見せる依夢。

こんな化け物を見て平気なのか？

正直、魔物なんてスライムげな奴を想像していた。
まさかいきなり、ギガントス級の奴が来るなんて。
俺は一步後ろに下がる。

次の瞬間ミノタウロスがこん棒を勢いよく横に振ってきた。

「うわー！」

間一髪、尻餅をついたおかげで避けることができた。

冗談じやねーぞ。あんなもん食らつたら骨が砕けちまつ。

「下がつてな、白い悪魔ちゃん。」

駿河の赤いポニーテールが田の前を遮る。

「ちゃん、にツツコむのを忘れるくらい俺はビビッてこる。

「ビ、ビツするんだよ。」

「なー」「ノタウロス」ときなら、あたし一人で十分だ。」

そんなことを言つと、駿河は赤いアルタ「を取り出す。

「リベラーシヨンー」

亜美のときと同様に、魔法陣が駿河の体を包む。光が一閃。

赤いポニー テールをたなびかせ。

短めのスカートに露出の多めな格好。

拳には赤いグローブ。

スカートの中にはスパッツを履いており

何とも身軽な格好だ。

差し詰め、格闘戦士と言つたところだらうか。

ちくせうー。またしても、サングラスを用意してなかつたとは。一生の不覚。

俺はこのコスプレを目に焼き付けるとする。

「ぐはつー。」

駿河に顔面を蹴られた。

「な、何しやがる。」

「ジロジロ見んな。バカつ。恥ずかしいだらうが。」

「恥ずかしがる」とはない。似合ひもある。その「アア……ぐは
つー。」

またしても、一蹴り。

「「スマッシュだとうまうまい前に鉄拳制裁してやるつか。」

「「めんなさい。すみません。ヒミツオーラ。」

「反省じたるのかな？」

駿河が笑顔で指を「ゴリ」「ゴリ」鳴らしている。

「まつたく。緊張感がないわよー。」

やけに、学園長の声が遠くから聞こえたと思つたら
少し離れたところにある電柱に俺と駿河以外は避難している。

「ちやつちやつとづけちやいなさい。茜^{あかね}。」

「はこはーい。」

駿河が元気よく手を振つた。

「轟もやつやとあわーく・・・危ないー轟ー。」

「つー。」

駿河のおかげでミノタウロスの一振りをかわすことができた。

「いっ、てててて。大丈夫か轟？」

「うー、うひ、うひ、うひー。」

俺は駿河の胸に埋もれていた。

苦しい！がこのまま窒息死しても構わないかもしない。

「悪い悪い。大丈夫か？」

「俺の理性は大丈夫だ。」

駿河が不思議そうに顔を傾げる。

「そんなことより、アレ。どうするんだ？」

「アレなら、あたしが止づける。」

「止づけるって。あんなデカい奴をどうやって。」

「まあ、任せな。一撃で終わらせてくる。」

駿河はそう言つと立ち上がりミノタウロスの方へ歩き出す。
一撃つて・・・アンタ。
アラレちゃんじやあるまいし。

「よくもやつてくれたなこの牛モドキ。」

「ヴォ――。」

今の発言で怒らせてしまったようだ。
何やつてんだ。

そして次の瞬間。

ミノタウロスの剛腕からこん棒が振り下ろされる。

「よつと。」

駿河はそれを軽やかに横に避ける。

「ヴォー！」

続いてそのままこん棒を横に振り切る。
がこれまで空を切った。

・・・？

駿河はどこに行つた？
姿が見当たらない。

「いじつちだこつち。」

マジか！？

駿河は振り切ったこん棒の上に乗つていた。

「これで終わりだ。」

駿河の拳が紅く燃える。

「鉄拳制裁 フイスト・オブ・ファイヤー！」

紅く燃える拳がミノタウロスの顔面へ放たれる。

「ヴォ――――――！」

それから顔面にめり込んだ。

クリティカルヒ――――――ット！

駿河は拳を離し、身軽にこん棒からジャンプして俺のところに着地した。

「ヴォ――――！」

ミノタウロスはものす」と雄叫びを上げている。

それから体が石化していき

次第に砂になつて碎けた。

・・・本当に一撃で倒しちゃつたよ。

俺は砂と化したミノタウロスであるつ砂をすべい上げる。指の隙間から零れ落ちていく。

「よつやく終わったみたいね。」

「うわっ――！」

いつの間にか学園長たちが後ろに来ていた。

「今のが魔物。どう？信じた？ネットゲーム界の白い悪魔ちゃん。」

「ちやん、言つな！まあ、田の前に現れてしまつたんですから信じるしかないでしょ。」

しかも、殺されかけたしな。

「ミヘタウロスは見た目は派手だし力も強いが、動きも遅いつまに頭も悪いから簡単に倒せるんだぞ。」

「だから、頭の悪い駿河でも倒せたのか。」

「今、聞き捨てならない発言が聞こえた。」

「空耳だ。」

「鉄拳制裁……する?」

「すんませんした!」

俺は土下座した。

「冗談じゃない。」

あんなもん顔面に食らった暁にはどこかの格闘技マンガみたいに歯がボロボロ折れて、その歯を闘技場に埋められちまつ。

「……見つけた……。」

依夢がわらわの砂の中から何かを見つけたようだ。

「……これ……。」

そつぱつて見せてきたのは紫色の六角形の結晶。真つ一つに割れている。

「!」これはアラジヤない!?」

亜美が驚いている。

「コア？」

「大体、魔物というのはね。人の感情が集まって突然変異で生まれてくるもの。でもこのコアは、人工的に魔物を生み出すアルマの塊。最近になって現世で起きているという不可解なムンドがらみの問題の一つがこのコアを悪用した問題よ。」

「ちょっと待つてください。このコアがここにあることは……」

「そう。誰かがこの現世に意図的に魔物を発生させているといつことが考えられるわ。最近はこの町に集中しているわ。」

「そ……だろ？」

「こんな化け物が意図的に……しかも、無差別に俺の住むこの町に放り込まれてるっていうのか？」

「……この魔物は、普通の人を見ることができるんですか？」

学園長は首を横に振る。

「アルマの純度が高い人しか見えないわ。靈感がある人とない人みたいな感じよ。」

「そんな……」

俺の膝が砕ける。

「じゃあ、いつ俺の母や友達が襲われるかわからないということじ

やないですか。』

静かな沈黙が訪れる。

「そんなことさせない。そのために聖魔璃亞学園があり……この・・・クラス？がある。』

亞美のその一言で俺は立ち上がった。

「そう・・・だつたな。』

「そうよ。だから、刹那。アンタもこのクラス？の仲間なんだから。力・・・貸しなさいよ。』

「もうひコース。』

俺は親指を突き立てる。

「じゃあ、一通り片付いたし戻りましょうか。』

『はい。』

学園長の言葉に俺を含む二人が一斉に返事した。

「じゃあ、行くわよ。ムーブメント・オン 学園へ。』

俺たちのを魔法陣が囲む。

?

ちょっと待て。

「待つてください。また学園長がムーブメントするんですかーー?」

確かアンタ、ムーブメント苦手なはずじゃ。

「もうコース。」

その言葉とウインクを最後に

俺たちはまた光に吸い込まれていく。

「ぎこああああああああああああああーー。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3542z/>

魔王的な（後から決める）

2012年1月8日22時48分発行